

校報

ましみず

1月号
掛合小学校
平成22年1月発行

年頭にあたって

校長 富田真樹

大寒も過ぎ、新しい年が明けてから随分日が経ちました。いささか時期外れの感もありますが、今年一年が皆様にとりまして良い年となりますことをお祈りし、新年のごあいさつといたします。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

一月八日の始業式では、「三学期はこの一年間の学びのまとめをする学期であり、また、六年生は中学校への進学、他の学年は一つ上の学年に進級するための準備と心構えをしていく大切な学期になるので、体調に気をつけてしっかりと取り組んでいこう。」という趣旨の話をしました。また、田坂教務主任は、「学校に出る日数は六年生が四十九日、五年生以下の学年は五十一日という短い学期であるので、一日の生活の中で、時間を大切にすることを忘れず、始業のチャイムとともに学習が始められるようにするなど、規律正しい学校生活を送りましょう。」という趣旨の話をしました。

さて、政権交代後、初めてとなる予算審議を中心とする第一七四回通常国会が一月十八日から始まりました。昨年末の予算編成時期に行われた、いわゆる「事業仕分け」により、文部科学省の事業も来年度はかなり変更が出てきます。その主なものの一つに「全国学力・学習状況調査」があります。これまでは全国の全部の公立小・中学校が

対象(悉皆調査)であったのが、一部の学校を対象とする抽出調査に変わりました。本校は、文部科学省がある一定の条件をつけて行った無作為抽出の結果、実施対象校となり、来年度も引き続きこの調査が行われることになりました。実施日は四月二十日(火)で、対象は第六学年です。また、現在、国の補助事業で行われている「学びいきいきサポート事業」の非常勤講師配置事業は、補助金が半額程度になる見込みとのことで、場合によっては配置がなくなる可能性もあります。高校の無償化、子ども手当で制度も含め、国の来年度予算については、今まで以上に関心と注目が集まることになりそうです。

授業日数の確保については、第一七号でお知らせした方針および具体的対処策に基づいて努力しているところです。一月中旬から学年によって一〜二名程度のインフルエンザによる欠席者が再び出始めました。学校では感染拡大防止のための対応レベルを引き上げました。この波が大きくならないように願っています。

二学期末には、ご多用の中「学校評価にかかる保護者アンケート」にご協力いただきありがとうございます。おかげで、その結果をお伝えすることになりましたが、貴重なご意見、あるいは肯定的意見、励ましのコメント等もたくさんいただきました。考にさせていただきます。今年度取りやめにした二学期末の個人面談を平成二十二年度は復活すること、終業式の日の午後授業などの検討をしています。

年度末の締めくくりと新しい年度のスタートが順調に進むように努力してまいります。ご理解とご協力をお願い申し上げます。

一月学習公開 PTA研修会

十一月二十二日に予定していた学習発表会をインフルエンザによる学校閉鎖等をしたため、内容を変更して、この学習公開に併せて行いました。



写真右は、六年生の発表「平和を広島から」右下はダンス「仲間と心をつなぐ」。写真左上は一年生学習公開の一場面。三年生は前半、学習発表会での発表予定だったオペレッタをしました。





写真下：4年生
はばたき(総合的な学習の時間)で調べてきた掛合の伝説をグループごとに劇や紙芝居にして発表しました。



写真上：2年生は学級活動で「四つの窓」というテーマで、自分と同じ考えをもった友達や、考えの異なる友達がいることを知り、お互いの理解を深めあう体験学習を行いました。

写真上：5年生
グラフから割合を読み取る算数の学習を行いました。いろいろなグラフから、割合を表すグラフの良さを見つけました。



PTA研修会「講演会」

「家族って何でしょう?」という演題で講演をしていただいたのは、出雲市灘分町の源光寺のご住職であり、幼稚園理事長兼園長をなさっている西谷正文様です。



西谷先生は、平田市教育委員、島根県PTA連合会会長等を歴任なさった教育に造詣の深い方です。絵本の読み聞かせも交えながら、約一時間半にわたって、「みんなが育ちあおうと協力し合う仲間の集まり」である家族を取り巻く諸問題について、多方面からの分かりやすい例をもとに意義深いお話をされました。終始柔和な表情と柔らかい声のお話により、理解が深まることにも癒された感じをもたれた方も多いのではないかと思います。

凛とした清冽な空気の中で

校内書き初め会 一月十三日・十四日

雪は多くはないものの寒中です。体育館では、ストーブを七台たいているにもかかわらず、なかなか暖かくなりません。しかし、その寒さを吹き飛ばすかのような気迫のこもった、熱心に取り組んだ書き初め会でした。

指導講師として中学年には大島寿子先生、高学年には積泰澄先生をお招きし、熱のこもったご指導をいただきました。お二人の先生には、二学期末にもおいでいただき、今回の書き初め会に向けて教わりました。



写真上右 大島寿子先生
写真上左 積泰澄先生



広い体育館のアリーナにいっぱい広がって書きました。上：高学年 右：中学年

校舎内の冬の遊び

雪が積もったら外での雪遊びが楽しくできます。しかし、雪解け後の校庭は土がゆるんでいて、校庭での遊びができません。

昨年、室内遊びの道具として将棋や囲碁セット、オセロなどを後援会会計で買いそろえました。今年は、さらにコマ、けん玉を加えました。外で遊べない日は、これらの遊び道具を使ったり、縄跳びをして休憩時間を過ごします。コマ回しのために養生板を

ランチルームとオープンスペースに張りりました。



写真右：全館オープンスペースでのコマ回し遊び。
写真下：ランチルームは3学期はインフルエンザ感染予防のため給食では使いません。



昼休み、上手にできるようになると、四年生の女の子が校長室へけん玉の披露にきました。早速、廊下でいろいろな技を、作り歌で調子をとりながら、やってみせてくれました。



三刀屋高校掛合分校
高校生の読み聞かせ

一月二十二日(金)、一年生から六年生までのすべての教室に分校の生徒さんが、ある教室には二人で、またある教室には一人で、それぞれ自分で選んだ本を持って来て、読み聞かせをしてくれました。初めての生徒さん、二度目

の生徒さんとは、緊張感も違っていたようですが、みなさん上手に読まれ、子どもたちも楽しく聞き入っていました。

3年生に本をよんでくださった高校1年の須山さん。家にある本の中から選んできたのだそうです。お母さんも読みきかせをしておられるそうです。



訂正とお断り

ましみず第一七号(平成二十一年十一月二十七日発行)の文章の中で誤解を招く表現がありましたので、お詫びと訂正をいたします。同号の第二ページの誤解を招く表現は、次の枠内の囲みの部分です。

5 医療機関が二つに分かれたこと
※ 学校待機職員が掛合診療所に「ハチ刺されのために複数の児童を搬送。」と事前連絡をしたところ、多人数は無理と言われ、平成病院に問い合わせましたが、ここでも診療科の関係で断られ、結局雲南病院に向かうことになりました。この旨(雲南病院に運ぶ)を搬送中の二台の車に連絡しましたが、一名は運転中のため受話器が取れず掛合診療所へ向かいました。事前通知後、掛合診療所では「受け入れ」に判断が変わっていて、結局五名の児童が診察・治療を受けました。

事前連絡の前に、ハチ刺されの児童を搬送する第一報を入れましたが、その際には人数や症状が不明だったため、単にこれから搬送する旨を伝えました。第二回目の事前連絡の際に九人という人数を伝えたと、「医療器具等の数が不足して対応できない。」という趣旨の回答がありました。そこで、学校待機職員は別の医療機関を探しました。「雲南病院へ運ぶ。」という連絡をしましたが、一人で運転をして

いたため、その連絡（雲南病院へ運べ）が受けとれず、当初の指示のとおり掛合診療所に向かいました。

掛合診療所では「受け入れ設備・器具などの面で無理だと言ったのに運んでこられたぞ。」と、いぶかしく思われながらも、拒否することはできないと人道的対応として運びこまれた五人の児童の手当てをしていただきました。

以上がその時の実際の状況であり、「診療所の判断が『受け入れできない』から『受け入れ』に判断が変わっていた」というのは、真実ではありません。診療所としては、設備面等で無理な面があるが、実際に患者が運びこまれてくるのだから、門前払いのようなことはできないと、受け入れていただいたということです。

第一報の際には「受け入れる」とも、「不可能」とも回答されていませんでしたが、そのことと第二報の際の「設備面のこともあり受け入れられない」という趣旨の回答とが異なっているように筆者が思ったことが、このような誤解を招く表現になってしまいました。

診療拒否をされたかのような誤解を招く不適切な表現をしたことで、掛合診療所様に変々ご迷惑をおかけし、また、この校報をお読みくださった方には不信の感を持たれたであろうと存じます。

ここに、謹んでお詫びを申し上げますとともに、前後関係について説明させていただきます。



「冷暖自知」ということ

兵庫教育大学学長である梶田叡一氏（松江市出身）の著書に、「和魂に学ぶ」〜日本人の源流を求めて〜（東京書籍出版）があります。日本古来の精神と伝統を新たな視点から据え直し、それらを基盤に世界と交流することの大切さを説かれた書です。この中に述べられている論から、部分的に文章を引用しながら「直接体験の重要性」について、次号（二月号）とのシリーズで考えていきたいと思えます。

文中、明朝体で表記した文は、「和魂に学ぶ」の抜粋です。「何かが本当に分かるということ、何かを本当に伝えるということ、単に言葉の上でのだけのことではありません。自分の体験を通じ、実感に根差してでなくては、大事なことは分かりようがないのです。そして、本当に大事なことの伝え合いは、お互いの共通体験という基盤を確かめ合いながら、お互いの実感世界の中をまさぐり合いながら、でなくては不可能なのです。」

でも、言葉を知っているだけで、そのことが分かったつもりになっていくことが、よくあります。言葉を尽くして説きさえすればそのことを分からせることができる、懸命になって話していることもあります。そうした折に「冷暖自知」という言葉をハツと思ひ起こして、自分の浅はかさを思い知らされたような気がすることがあります。

特に、「お茶」や「お花」をはじめとする日本の伝統文化の世界では、ものの感じ方や味わい方、その基盤となる心情のあり方、気持ちの整え方が大切に なります。こうした面になると、言葉は直接的な有効性を失うことが多いのではないのでしょうか。言葉以前の、体験すること、実感することが決定的な役割を演じるようになるよう思われます。（中略）

このあと氏は、約千年前に中国で編纂された禅問答の集大成である「景德伝灯録」の中に、「人の水を飲んで冷暖を自ら知るが如し。」とあることをひいて、実際に水を飲んでみれば、それが冷たいか暖かいが自然に分かることが「冷暖自知」の意味であると述べておられます。また、だからといって体験が絶対であるという考え方に固まってしまうこと、偏った考え方も良くないと、鎌倉時代の禅僧の道元が述べたことも取り上げられます。

「いずれにせよ、言葉から入って体験と実感の世界に気付き、新たな形で自らの体験と実感の世界を意味付けし直す、といった作業が必要となります。そして、それと同時に、その逆の道筋ともなりますが、自分自身の体験と実感世界を言語化し、その言葉になった部分が自分自身の体験や実感とどのようにつながっているかを問題としてみる、ということが大切になるでしょう。こうした形の絶えざる往復作業が、私たちには常に必要とされるのではないのでしょうか。」

【感性が軽視されがちな現代において】
それにしても、最近の子どもは難しい言葉を用いる知っているけれど、そうした言葉の意味するところを本当に分かっているわけではない、ということをよく耳にします。実はこうした傾向は子どもだけのことでなく、若者にも、壮年にも、そして老人にさえ見られる現代の文明病ではないのでしょうか。流行の言葉を深く意味も考えないまま口にし、言葉の上でつじつまを合わせるだけの思考をし、互いにその場限りのやりとりをするだけの会話をしがち、といった生活習慣の中で、言葉が限りなく軽いものになり、単なる符丁になったり合言葉になったりしているのではないかと、という感じがありません。（以下次号）